

実践したお母さん方の驚き

こうした調査や報告は、実はもっともっとたくさんあるのですが、それは本書の「いま全国の実践幼稚園で……」を参照していただくことにしましょう。そこには“漢字で遊ぶ”楽しさを覚えた子どもたちの織り成すエピソードが、様々に語られています。「新聞の拾い読みをしているのを見てお客様がびっくりした」「兄、姉より漢字がたくさん読めるので、上の子もやる気を起こした」「電車の駅で迷子になったが、途中乗り換えが三回あるのに、駅の案内板を見ながら無事に家へ帰ってきた」等々……。

それでも、このようなことは、ベテランの先生方が長い経験と知識を生かし、熱意を持って教育に取り組んできた成果である、と思い込んでしまうお母さん方もあるかも知れません。ところが、そういうベテランの先生方や、そしてこの石井方式を研究、実践してきた当の石井勲先生も自ら「親こそ最良の教師である」と繰り返し説かれています。前に出てきた園児への質問項目「わからない字をお母さんに尋ねますか？」の結果とその分析を見ても明らかなように、親の果たす役割は大きなものがあるといわざるをえません。第一、こうした漢字教育を実

践する幼稚園や学校が近辺にないとなれば、「親こそ……」との確信を持つ必要性はいよいよ増してくるでしょう。

といっても、肩ひじ張る必要は全くありません。とにかく“漢字で遊ぶ”ように心がければいいのですから。

それでも「わたしにできるかしら？」と思っている方に、実際、子どもと漢字で“遊び始めたばかり”のお母さん方の声を少しお聞かせしましょう。

これは、昭和58年の春先、前出のかわいい学園で行なわれた石井勲先生の講演を聴いて、しばらくしてから出されたお母さん方の感想文から取ったものです。石井先生のお話は、丁度、本書の「子どもはみな神童」を要約されたものと考えていただければ結構です。

「あれから(講演を聞いてから=註)、カードを見せて『これはなあに？』とやってみますと、うれしそうに答えます。母親との会話の一つのように感じているように思いました。とかく、何か教えたりしようとする時は、坐らせて、紙に書かせて……となりがちですが、子どもはお友達と遊びたくて、お天気のよい日はとくにそれどころではないようです。石井先生の方法ですと、ちょっと着替えをしている間とか、おやつの前とか時間も取らないからでしょうか、子どもも喜んでやります」(5歳

児の母親)

「石井先生のお話を聞き、とても勉強になりました。私自身、小学校のころ漢字ってむずかしい、いやだなと思っていました。(中略)具体的に自然に、漢字と接していると、子どもはいやだなという気持ちにはならないと思います。入園式で漢字を見た時は“えっ”と思いましたが、子どもたちはすぐに覚えてしまいました。かなよりも漢字の方が理解しやすいのですね」(5歳児の母親)

「私は、最初は、3歳から漢字を教えるのに少しとまどいを感じておりました。しかし、少しずつやってみると、意外に私が思っているより速く、子どもは漢字を覚えるようでした。ほんの少ししかやっていないのですが。(中略)子どもは喜んでカードを持ってきて『これなあに?』とかよく聞くものですから、教えたりするとすぐ覚えます。やっぱりこれくらいの子は覚えるのも速いのでびっくりしております」(4歳児の母親)

「先生のお話を聞く機会が持てたこと、大変うれしく思いました。お話や著書を参考にしながらやり始めました。(中略)知らない漢字を一日7文字ずつ、一週間繰り返して見せたあと、一覧表にし、その次もまた知らないカード7枚を繰り返す、という作業を続行中です。最初から興味を示してくれていたためとてもやりやすく、今朝も自分から起きが

けに漢字カードの箱を下げきて、『お母さん、早くやって』とせかしてきました。台所にいて、心の準備もできておらずとまどいでしたが、やはりその言葉がうれしくてさっそく尋ねてやりました」(3歳児の母親)

母と子が、対話を、ふれ合いを深めながら、楽しく漢字で遊んでいる様子がよくわかるでしょう。いずれも、まだまだ始めたばかりのお母さん方の声です。

もちろん、ごく少数ですが、次のような感想のあったことも付記しておきましょう。

「幼稚園の子、小学一年の子、小学四年の子と漢字カードを見せながら順番に読ませるのですが、先の二人で答えてしまい、四年の子の順番がなかなか回ってこなく、結局『わたしも幼稚園の時から教えて欲しかった』といいました。この一言に胸を痛めながら、取り返しのつかない失敗をしたような気持ちになっております。それでも、三人の子どもたちが、漢字に思いがけない魅力を持ってくれたこと、親として言葉にいいつくせないものを感じております」(4歳児の母親)